滝大吉講述『建築学講義録』の刊行と工業夜学校について

STUDY ON THE PUBLICATION OF “KENTIKUGAKU-KOUGIROKU”
LECTURED BY DAIKITI TAKI AND KOUGYO-YOGAKKO平山 育男^{*1}

Ikuo HIRAYAMA

This article examined “Kogyoyogakko-kougiroku” separate volume and “Kentikugaku-kougiroku” bound volumes, it’s following points to become clear.

“Kogyoyogakko-kougiroku” which launched as the lecture record of Kogyoyogakko-kougiroku on October 5, 1890 separate volume was released every month afterward on 25th on 15th on 5th. After Taki moved to Tokyo in February, 1891, “Kogyoyogakko-kougiroku” changed the name to “Kentikugaku-kougiroku”. However, the issuance was stopped soon. “Kentikugaku-kougiroku” continuing publication began in July, 1893. The issuance of this book was over in August, 1894, and bound volumes was published on April 15, 1896.

Keywords : Daikiti TAKI, “Kentikugaku-Kougiroku”, Kogyo-yogakko, Siro MITUHASI

滝大吉, 『建築学講義録』, 工業夜学校, 三橋四郎

1 はじめに

筆者はこれまで、コンドルの事蹟を追う過程で滝大吉について幾つかの論考をまとめている^{注1) 注2)}。ところで従来明らかにされた滝の経歴によれば、滝は明治21(1888)年11月頃から陸軍省への勤務前となる明治24(1891)年2月頃までは関西に居所を置いて土木建築工事鑑定所や工業夜学校を開き、同校の講義録である『工業夜学校講義録』分冊を発刊し、これを後に『建築学講義録』合本として出版した^{注3)}とするが、後述のように工業夜学校の授業日や出版の過程は従来明らかとされていない。そこで本稿では大阪における滝大吉の動向、工業夜学校の授業日や『工業夜学校講義録』分冊の発刊や内容、『建築学講義録』分冊、『建築学講義録』合本発刊に至る経緯などを明示することを目的とする。

2 三橋四郎の訃報記事に見る滝大吉の関西での動向と従来説の検討

2-1 三橋四郎による追悼記事に見る滝大吉の関西での動向

先ずは明治21(1888)年10月から明治24(1891)年2月における滝の関西での活動を見るため、三橋四郎による滝大吉の追悼記事を示し事実関係を整理したい。記事の該当部分は以下の通りである。

同[著者注：明治]二十一年十月神戸において明治工業会社設立し、同社建築部長を担当す、同二十二年四月同社を退き大阪に於て土木建築工事鑑定所及工業夜学校を開設し、続て建築講義録を発行し、経験と知識とを以て熱心に学生に薫陶す、同二十

三年四月明治工業会社相談役に嘱託せられ際余にして辞す^{注4)}

記事によれば、滝は明治21(1888)年10月、神戸の明治工業会社で建築部長の職に就いたが、明治22(1889)年4月には同社を退き、大阪で土木建築工事鑑定所、工業夜学校を開設した。併せて『工業夜学校講義録』を発行し、明治23(1890)年4月には明治工業会社相談役に嘱託されたが程なく退いたという。

このように追悼記事では明治工業会社を退いた後、大阪で土木建築工事鑑定所、工業夜学校を開いた時期と、『工業夜学校講義録』発刊の時期が記されない。

2-2 既往の説に見る滝大吉の関西での動向

・清水慶一による考察とその検討

この時期における滝の動向について清水慶一は昭和56(1981)年12月刊『日本建築学会論文報告集』310で、前述した三橋の追悼記事や、『大阪朝日新聞』の明治23(1890)年4月29日、6月23日号に基づき以下のように記している。

工業夜学校は明治23年6月1日、瀧大吉と斎藤賢治が大阪において開設した私立の工業教育機関である。《中略》当時の瀧の事蹟は次の如くである。明治21年神戸に於て明治工業会社を設立し、その設計部長^{注5)}を担任す。同23年4月、同社を退職し、大阪市東区平野町にて工学士瀧大吉建築事務所を開設す。同年6月事務所を西区江戸堀南通3丁目104番地に移転し、同月1日、工業夜学校を同区江戸堀通3丁目82番屋敷に同設した。《中

*1 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

略》同工業夜学校建築科は明治 24 年 3 月、瀧が陸軍技師補に任じられたことにより閉科せられ、実際に卒業生は出さずに終始したのではないかと考えられる。この理由から同校の教育効果は期待し得無いが、工業夜学校は教育機関としての役割よりもむしろ、同講義に基いて編纂された建築教科書『工業夜学校講義録』に注目すべきであろう。《中略》同『講義録』は瀧が陸軍に奉職した後も内容の充実がはかられ、『建築学講義録』として完成された^{注6)}。

清水による記載が三橋の追悼記事より詳細な点は、三橋が“土木建築工事鑑定所”とする滝の事務所名を“工学士滝大吉建築事務所”とし、所在地が大阪市東区平野町であったものを、明治 23（1890）年 6 月に西区江戸堀南通 3 丁目 104 番地に移転したとすること、また、三橋は工業夜学校の開校時期を示さないが、清水はこれを明治 23（1890）年 6 月 1 日として、所在地を大阪市西区江戸堀通 3 丁目 82 番屋敷とする点である。

事務所名は清水が挙げる明治 23(1890)年 4 月 29 日付『大阪朝日新聞』4 頁に滝による事務所の広告が掲載されるが、住所は詳しく大阪市東区平野町堺筋南へ入ル^{注7)}

とある。なお、管見では同紙 4 月 26 日号が滝による広告の初見で、事務所は“井ヨシ商店”（井吉商店）に“建築商議局”^{注8)}とある^{注9)}。

一方、事務所移転は明治 23(1890)年 6 月刊『建築雑誌』42 に
○滝大吉君 工学士滝大吉君ハ大坂市西区江戸堀南通三丁目百四番地ニ建築事務所ヲ設ケ建造物、家具、裝飾品ニ関スル計画、製図、予算調、鑑定、監督等ニ応スル由曩ニハ鳥居工学士之講義録アリ今又滝工学士ノ夜学校ナドノ設アリ^{注10)}

とあるが、ここに 6 月とする移転時期の記載はない。なお、清水が挙げる『大阪朝日新聞』明治 23(1890)年 6 月 23 日号は休刊で、移転時期は『大阪毎日新聞』明治 23(1890)年 5 月 20 日号に工学士滝大吉建築事務所移転広告^{注11)}の掲載されるものが管見の限り最も遡り、少なくとも事務所移転は明治 23(1890)年 5 月となる。なお、滝の江戸堀への移転は、ともに工業夜学校で授業を行った斎藤の事務所が既に明治 23（1890）年 1 月の段階で江戸堀に開かれ^{注12)}、これをたよりに移転したものと推察される。

工業夜学校の開校は『建築雑誌』42 の 105～106 頁に
○工業夜学校 本会正員滝大吉君ハ応用化学科専門家ナル工学士斎藤氏ト同謀ノ上本月一日ヨリ大坂市西区江戸堀通り三丁目八十二番地屋敷ニ題号ノ如キ夜学校ヲ開設^{注13)}
とある記事に基づくと考えられるが、更に詳しくは『大阪朝日新聞』明治 23(1890)年 6 月 4 日号に

●工業夜学校
本校ハ毎週月水金ノ三曜日午后六時半ヨリ全九時迄建築学及ビ製造化学ノ二科ヲ教授ス
大阪市西区江戸堀 下 通 三 丁 目 工業夜学校
講師 工学士 滝 大吉君 ^{注14)}
工学士 斎藤賢治君

とあり、毎週月水金の 18 時 30 分から 21 時の開校であった^{注15)}。
なお、清水は、注釈で三橋の追悼記事中、“明治 23～4 年の記述に若干の誤りが見られる”^{注16)}とするが、その点は明確に示さない。三橋の記事における錯誤とは、滝が明治工業を明治 22(1899)年 4 月に退いたとする点で、滝は明治 23(1899)年 4 月に同社を退き相談役に就き^{注17)}、これも退き大阪へ転じたことになる^{注18)}。

・堀勇良による考察とその検討

堀勇良は、昭和 57(1982)年 7 月刊行の『科学朝日』に“近代日本の異色建築家 7 奇傑として豪壮に生きた 滝大吉”とする文章を寄せ、滝の大阪における事蹟を以下のようにまとめた。

明治 23（1890）年 4 月、大阪において「工学士滝大吉建築事務所」を開設する。《中略》6 月には、応用化学出身の斎藤賢治と組んで工業夜学校を主宰する。『建築学講義録』はこの工業学校での講義をもとにしたものである。しかし、商都大阪とはいえ、民間の建築需要はまだふるわず、設計事務所も工業夜学校も 1 年ともたず再び東上する。《中略》明治 24(1891)年 3 月陸軍省に入り、築郡建築法の改訂に従事し、陸軍建築近代化の基礎を固める^{注19)}。

堀による記載は多く三橋の記事によると考えられるが、滝の事務所名を“工学士滝大吉建築事務所”とし、工業夜学校の開校時期を明治 23（1890）年 6 月とする点が踏み込んだ記載となる。ここで堀は事務所名の根拠を示していないが、清水慶一からの教示として、前掲した清水の論文に先行する昭和 56(1981)年 8 月刊の『日本の建築明治大正昭和』10、において明治 23(1890)年 4 月 29 日付『大阪朝日新聞』における記載を示す^{注20)}。

2-3 滝大吉の関西における動向

滝の関西における動向をまとめると、滝は明治 21(1888)年 10 月に明治工業会社の立ち上げに関わり、明治 23(1899)年 4 月に同社を退き相談役となった。しかし、程なく大阪市東区平野町に転じて工学士瀧大吉建築事務所を開き、同年 5 月末に事務所を江戸堀南通に移し、同年 6 月から開設した工業夜学校は毎週月水金の 3 日、18 時半から 21 時までの開校であった。

3 『工業夜学校講義録』分冊^{注21)}の発行

滝らにより創立された工業夜学校講義録として創刊された『工業夜学校講義録』分冊の出自は上述のように示されているが、『建築学講義録』分冊と名称を変え、最終的に『建築学講義録』合本として出版されるに至った経緯は、従来は明らかではない。以下では、先ず『工業夜学校講義録』分冊発行の経緯を考察したい。

3-1 『工業夜学校講義録』分冊の創刊時期

『工業夜学校講義録』分冊の創刊時期について従来は指摘がないが、明治 23(1890)年 10 月刊『建築雑誌』46 に

○工業夜学校 建築雑誌第四十二号ニ載セタル工業夜学校ノ講義録ハ本月五日第一号ヲ発兌シ爾後毎月五ノ日ニ発刊スル由其科目及受持学士ハ左ノ如シ

建築科	普通建築学 材料強弱論 建築略史 建築物理学 図学
講師	工学士 滝大吉君
製造科	染色法 沃度 マツチ 砂糖 其他化学ニ関スル製造品
講師	工 学 士 英国化学工業会員 斎藤賢治君
予備科	物理及化学大意 数学大意
講師	前両君分擔

同講義録発行所ハ大坂市西区江戸堀南通三丁目百〇四番地工業夜学校講義録発行所ニシテ一部ノ価金十五銭三回分前金四十銭通送料五厘郵券代用一割増ナル由^{注22)}

とあり、明治 23(1890)年 10 月 5 日に創刊されたこと^{注23)}が分かる。

3-2 『工業夜学校講義録』分冊 1 号の内容

『工業夜学校講義録』分冊 1 号の内容と分量は従来、示されないが、明治 23(1890)年 10 月 12 日付『時事新報』^{注24)} 広告^{注25)}には

●工業夜学校講義録第一号目次十月五日発行建築科工学士滝大吉君
第一章建築学ノ目次
第二章第一節（地質）地質ノ區別及ヒ各自ノ性状○第二節（地形）ノ種類及ヒ材料○コンクリートノ定義及ヒ材料○砕石○藍
洋○煉瓦屑○陶器○石灰○ガラス屑○焼キ土○石灰質○砂利○モルタルノ定義及ヒ材料○砂○焼キ土○煉瓦○瓦○土管○敷
石屑○石灰○火
造
学
科
分
○染色法第一章総論○染色法ノ目的○糖樹ノ説○糖樹ノ種類○綿花ノ理学的組織及ヒ化学的成
山灰○セメント
等ノ作問答
法○同女校鉄ボルト各部ノ寸法ヲ定ムル
用

毎月五ノ日発兌一回前金十五銭三回分前金四十銭

但シ全国通送料ナシ五厘郵券代用一割増ノ

大坂市西区江戸堀南通三丁目百〇四番地

工業夜学校講義録発行所

とある。後に合本された『建築学講義録』巻一の目次と比べると

●第一章 建築学の目的	一頁
●第二章 地形	六
●第一説 地質	六
●第二節 地形	八
地形の種類及材料	八
コンクリートの定義及材料	八
砕石、鈹滓 一〇●煉瓦屑、陶器、石灰、ガラス屑 一	
〇焼土、石灰粕、砂利 一〇	
モルタルの定義及材料	一一
砂、焼土、煉瓦屑、土管、瓦、敷石屑 一二●石灰、	
火山灰 一三●セメント 一三 ^{注26)}	

となる。なお、広告と『建築学講義録』巻一を比較し全く重複するものに編み目を掛けた(以下、同様)。以上から『工業夜学校講義録』分冊 1 号の内容は『建築学講義録』巻一の 1 頁から 13 頁までとなる。並びはほぼ等しいが、“モルタルの定義及材料”の項目中、“瓦”と“土管”の項目が前後する。ところで、広告と『建築学講義録』巻一で内容を比較すると、第一章を広告では“建築学の目的及び二三の例”とするが、『建築学講義録』巻一の目次では単に“建築学の目的”^{注27)}とする。但し、『建築学講義録』巻一の本文では“建築学の主意及び二三の例”^{注28)}とあり、その事例として

第一例 丸太より梁を取る時^{注29)}

第二例 梁ノ荷ヲ支ヘル工合^{注30)}

を挙げる。また、広告で“問答”は女捻付鉄ボルトについての二問を載せるが、『建築学講義録』巻一の“問答”に同一名称の題名はない。但し、第 14 問に“木捻じの力を問ふ”^{注31)}がある。

3-3 『工業夜学校講義録』分冊 2 号以後の発行

『工業夜学校講義録』分冊の発行は『工業夜学校講義録』分冊 1 号広告に“毎月五の日発兌”とある。以後の発刊状況を広告などにより確認すると以下ようになる。

・『工業夜学校講義録』分冊 2 号

『工業夜学校講義録』分冊 2 号の発行は、明治 23(1890)年 10 月 19 日刊の『読売新聞』に以下の広告がある。

○工業夜学校講義録第二号発兌広告○
建築科○地形の続○工学士滝 大吉君
製造科○染物の続○工学士斎藤賢吉君
毎月五の日発兌○一冊前金拾五銭三冊
前金四拾銭十冊前金壱円○全国通送料
なし五厘郵便切手代用一割増
大坂西区江戸堀南通三丁目

十月十五日 工業夜学校講義録発行所^{注32)}

『工業夜学校講義録』分冊 2 号の発刊は“十月十五日”とあるため明治 23(1890)年 10 月 15 日となる。これは『工業夜学校講義録』分冊 1 号の広告に“毎月五の日発兌”とるため、『工業夜学校講義録』分冊は毎月 5 日、15 日、25 日と月 3 回の発行を考えたことが分かる。

『工業夜学校講義録』分冊 2 号における建築科の内容は“地業の続”とあるだけで具体的な内容は判明しない。但し、『建築学講義録』巻一の目次に従えば、『工業夜学校講義録』分冊 1 号では“第二章 地形”の“第二節 地形”において 13 頁“モルタルの定義及材料”までの記載であつたため、以後の“石灰”などの記載と考えられる。

・『工業夜学校講義録』分冊 3 号

『工業夜学校講義録』分冊 3 号の広告は、明治 23(1890)年 10 月 30 日刊『読売新聞』に見ることができる。

●工業夜学校講義録第三号発兌広告

建築科工学士滝大吉君
第二章第二節地形(前号の続)セメント識別法○粒の事○重さの事○力の事○内外諸種セメント比較試験表並びに利害○粒の大小に由りモルタルの力に相違を生ずる事並に例○セメントの良否より生ずる価格の事並に例○水の分○量に由りセメントの力に強弱あること○風化花崗岩の事等(未完)製造科学科《中略》問答 第三輯寸板寸法の事○重なる厚み番号の事○第五諸金屬重みの事○第六調勻配量 第一二両号再刊の分より爾後毎回建築及製造化学の二科を別に七を乗する件○第七三十度に相当する勾配の事
確
告
冊とし予備料及当用の事項ハ臨時附録と相改め左の定価を以て発売可致候也○前金定価一科一冊六錢五厘三冊十八錢五厘二十七八十冊五十錢兩科にても割引せず○全国通送料なし

十月廿五日 大坂市西区江戸堀南通三丁目

工業夜学校講義録発行所^{注33)}

上の内容を『建築学講義録』巻一の目次で続きを確認すると	
石灰	一三
各種石灰の利害 一三●生石灰使用法 一四●石灰の固まらざる理由 一六●同危害の性質 一七●耐水質石灰 一八●石灰の識別法 一九	
火山灰	二一
火山灰の性質及所在 二一●同実用法 二一	
セメント	二六

天然セメント 二六●人造セメントの種類 二七●セメントに関する注意 二七●セメント識別法 二八●同粒、重、色、力二九●内外国製セメント 三二●粒の大小より生ずるモルタルの力 三三●セメントの良否より生ずる実価 三七●水の分量より生ずるセメントの強力 四〇 ^{注34)}	
---	--

となる。項目名は『工業夜学校講義録』分冊 3 号広告と『建築学講義録』巻一ではやや異なるが、『工業夜学校講義録』分冊 3 号は、『建築学講義録』巻一の 32 頁から 40 頁に該当する。

・『工業夜学校講義録』分冊 4 号

『工業夜学校講義録』分冊 4 号の広告は、明治 23(1890)年 11 月 6 日付『読売新聞』に確認できる。

●工業夜学校講義録第四号十一月五日発兌広告

建築科 地形の続●風化花崗石試験表●調査法利害●各種叫土調●セメントとの比較代価●塩の作用●煉砂利製法●注意●調査●骨隙間●煉砂利種類●強弱●各種の骨にて作りたる力●原料●出来高●石灰煉砂利●調査●強力●打入れ方●地形●モルタルノ力●生ずる事項ハ臨時附録とし下の定価に発売可致候 前金定価 一科一冊六錢五厘三冊十八錢五厘二十七銭十 冊五十錢兩科にても割れせず○全国通送料なし ^{注35)}

これも、『建築学講義録』巻一の目次の続きと比較すると	
風化花崗石	四一
調合 四三●種類 四六●代価 四七●塩分の作用 四七	
コンクリート製造法	四八
調合 四八●骨の「スキマ」 四九●各種コンクリート	

五〇●同強弱 五一●骨より生するコンクリートの
力 二五●コンクリートの原料及産学 五二●石灰
コンクリート 五五●調査 五五●同コンクリート
練方並打方 五五●注意 五七
地形の定義並大意 五七
地質検査 五八^{注36)}

となる。『建築学講義録』巻一の“コンクリート製造法”の中、項目
題名が広告では抜けて分かりづらいものの、『工業夜学校講義録』分
冊 4 号の内容は『建築学講義録』巻一の 41 頁から 58 頁となる。

・『工業夜学校講義録』分冊 5 号

『工業夜学校講義録』分冊 5 号の発刊は、明治 23(1890)年 11 月
25 日印刷と考えられる『出版月評』37^{注37)}に確認できる。10 月 5 日
の発兌以来、11 月 15 日に 5 号が出たと判断できる。

・『工業夜学校講義録』分冊 9 号

以後、『工業夜学校講義録』分冊の広告は未確認であるが、『工業
夜学校講義録』分冊 9 号の発刊を、明治 24(1891)年 1 月 28 日刊『東
京朝日新聞』が以下のように報道する

工業夜学校講義録(九号)

大坂西区江戸堀南通三丁目百四番地工業夜学校^{注38)}。

内容は記されないが、前年の 10 月初旬以来、各 5 日に発刊を重ね
れば、3 ヶ月目の明治 24(1891)年 1 月 25 日に『工業夜学校講義録』
9 号が発刊されたことになる。

なお、この後、明治 24(1891)年 2 月 24 日刊『読売新聞』に『工
業夜学校講義録』分冊の広告^{注39)}があるため、号数は明らかでない
が、少なくとも明治 24(1891)年 2 月末までは『工業夜学校講義録』
分冊の発刊の続けられたことが判明する。

3-4 『工業夜学校講義録』各冊における本文の分量

以上のように、『工業夜学校講義録』分冊について 1 号から 4 号の
内容が明らかとなった。『建築学講義録』巻一と比較すると、『工業
夜学校講義録』分冊 1 号が『建築学講義録』巻一の 13 頁分、『工業
夜学校講義録』分冊 2 号が 16 頁分、『工業夜学校講義録』分冊 3 号
が 13 頁分、『工業夜学校講義録』分冊 4 号が 18 頁分となる。これを
平均すれば、『工業夜学校講義録』分冊は 1 号あたり『建築学講義録』
巻一において本文 15 頁程の分量となる。

なお、本文とは別に“問答”が『工業夜学校講義録』分冊に付さ
れたことが『工業夜学校講義録』分冊 1 号の広告から分かる^{注40)}。『建
築学講義録』巻一では“問答”も柱(ヘッダー)において“工業夜
学校講義録”“建築学講義録”とされ、記載が異なる。因みに、“問答”
において“工業夜学校講義録”分は“問 25”までの 34 頁分となる。

また、『建築学講義録』巻一卷末には柱(ヘッダー)に“工業夜学
校講義録”と題し、“建築材料強弱表”とする記載が 26 頁あり、こ
れらも『工業夜学校講義録』分冊として発刊されたと考えられる。

以上より、『工業夜学校講義録』分冊は 1 号あたり『建築学講義録』
巻一において本文 15 頁程、加えて“問答”が数問あり、“建築材料
強弱表”の掲載も適宜あったことになる。

4 『建築学講義録』分冊の発行

4-1 『建築学講義録』分冊の発刊

滝大吉は明治 24(1891)年 2 月に居所を東京へ移し、3 月からは陸
軍省へ務めた^{注41)}ため、工業夜学校は廃校になったと考えられてい

る^{注42)}。以下、この時期における講義録の発行を見て行きたい。

明治 24(1891)年 6 月刊『建築雑誌』54 に“建築学講義録”として

○建築学講義録 本会々員滝大吉氏は曾て大坂にありしとき工
業夜学校講義録を頒布し大に工業者を益せし事は既に人の知る
所なるが同氏は目下居を東京に移し陸軍に奉職の旁ら益と力を
講義録に用ひ居たると由工業夜学校講義録を改て題号の如く為
し其発行所を芝区露月町十八番地と定め其売捌所を同所米倉書
店^{注43)}等と定めあり^{注44)}

とする記事がある。内容から滝は東京へ移って陸軍に奉職後も講義
録執筆に当たったことが分かる。但し、工業夜学校は閉校のためで
あろうか、名称を“建築学講義録”と改めたとする。実際、『建築学
講義録』巻一では、第二章の 131 頁までは柱(ヘッダー)に“工業
夜学校講義録”と記載されるが、中扉を挟んだ 133 頁の第三章から
は柱(ヘッダー)が“建築学講義録”となり、割付も異なる。

この編集上の相違を滝の転居等と併せて考えれば、『建築学講義録』
巻一の第一章、第二章が『工業夜学校講義録』分冊として刊行され、
以下は『建築学講義録』分冊として発行されたと見ることができる。

4-2 『建築学講義録』分冊の休刊、続刊と完結

・従来の説

従来、『建築学講義録』分冊などの刊行経緯について、清水慶一は
同講義録は明治 27 年 8 月に一時廃版されたいが、前掲の如
く、明治 42 年 3 月版の『建築学講義録』が存在し瀧が告別の辞
を出した後も引き続き刊行されている。

とする^{注45)}が、錯誤が目立つ。清水が言う“同講義録は明治 27 年 8
月に一時廃版”とする点は、後掲する『建築学講義録』分冊に掲載
された滝による明治 27(1894)年 8 月付の“告別之辞”^{注46)}を指すと
考えられる。しかし、“告別之辞”は後述のように『工業夜学校講義
録』分冊及び『建築学講義録』分冊の“跋文”で、『建築学講義録』
分冊及び合本の廃版は意味しない。また、“明治 42 年 3 月版の『建
築学講義録』”とは『建築学講義録』合本 16 版の発行日^{注47)}を指す
と考えられるが、後述のように『建築学講義録』分冊“跋文”と『建
築学講義録』合本の発刊は直接的な関係はなく、明治 42(1909)年
3 月の時点で『建築学講義録』合本は版を重ね発刊がなされていた。

・『建築学講義録』分冊の休刊、続刊と完結

さて、『建築学講義録』分冊が継続的に発刊されたわけではなかつ
たことは、以下の資料から判明する。明治 26(1893)年 7 月刊行の『建
築雑誌』79 には、吉原米次郎により記された“会員諸君に望む”と
題する以下のような記事がある。なお、吉原は明治 24(1891)年 3 月
に造家学会へ准会員として入会^{注48)}の出版業者^{注49)}で、大正 8(1919)
年 11 月 16 日に死没している^{注50)}。

○会員諸君に望む

会 員 吉原米次郎

今や出版の途だに開け著述の世に出るもの日に月に其数を加へ
座なからにして尚ほ天下の形勢を知ることを得屋外尺寸の地を
蹈ますして毫も良師無きに困ます洵に此文運隆昌の時代に在つ
て学を修め事を研むるものと幸福と謂ふべし然れども之か裏面
を考察すれば文化未だ遍からず現今流行を極むる新刊書籍の多
数は大概ね皆文学、経済、法律等に関するものにして工学書の
出版に至りては寥々として晨星の如く就中建築書の出版発兌に
関し特に其然るを見る、試に今日以前の出版に係るものを算す

るに僅々二三の指を屈するに過ぎず豈本学を修むる後進者に取りて遺憾の極にあらずや曩に余輩ハ此必要に応じて聊か力を致さんと欲して建築書院を設立し専ら建築書発行の策を決し其第一着手として過般来休刊中なりし本会正員工学士の講述に係る建築学講義録を続刊せり然れども単に講義録発行のみにては僅に建築学の一斑を知るに止るを以て余輩は後來益々建築書院の業務を拡張して建築に関する読書を続々発兌せん事を期せり《後略》^{注51)}

記事で吉原は建築関係の出版物が少ないことを憂い、建築書院を設立し建築書の刊行を試み、その嚆矢として“過般来休刊中なりし本会正員工学士の講述に係る建築学講義録を続刊せり”とする。ここで建築学講義録の著者を具体的には記さないが、この文章に続く○邦文建築書

当地芝区南佐久間町一丁目建築書院にて売捌き居れる邦文書類の書名并に定価は左の如し

工学士 滝大吉君

●建築学講義録^{毎 月 売値十三銭 注52)}
^{二十日 郵税二 銭}

とする記事で吉原の建築書院にて滝大吉による“建築学講義録”を扱うため、“会員諸君に望む”とする文章における“建築学講義録”とは、滝による著作と判明する。なお、ここで注目すべき点は、吉原が休刊中であった“建築学講義録”を続刊させたとする箇所である。この点は滝が『建築学講義録』巻三巻末“告別之辞”において告別之辞

去る明治廿三年十月本講義録第一号発刊の当時より本月其終局を告ぐるに至る迄正に三年十ヶ月にして其間世故の類に制せらるゝ事多く遂に一回之を停刊するの不幸に際会せりと雖も偶々吉原米次郎君の建築書院を創立せらるゝに当り奮つて其続刊に従事せられたるか為め茲に始めて其終局を見るに至りしは不肖の全君に謝せざる能はざる所なりとす《中略》

明治廿七年八月 工学士 滝 大吉

愛読者諸君

各位^{注53)}

とする記載に対応する。引用の概要は、去る明治23(1890)年10月、本講義録第一号発刊から、今月の終局を迎えるまで3年10ヶ月に及び、この間、世故により、一回、停刊に及んだが、吉原米次郎が建築書院を創立してこの続刊のために奔走したため、終局を迎えるに至ったのは、不肖な自分が吉原に感謝するに相応しい、となる。

即ち、この文章は『工業夜学校講義録』分冊の発刊に始まり、『建築学講義録』分冊と名称を変え、停刊と続刊を挟み、“終局”、即ち終刊に至った『工業夜学校講義録』分冊と『建築学講義録』分冊の“跋文”となる。つまり、停刊となった『建築学講義録』分冊が吉原の尽力で続刊となったことは明らかである。なお、『工業夜学校講義録』分冊及び『建築学講義録』分冊の終刊は“告別之辞”末尾にある明治27(1894)年8月となる。

ところで、『建築学講義録』分冊の停刊、続刊の時期はこの文章からは判明しないが、明治26(1893)年7月末から建築書院による

滝工学士述

建築学講義録

毎月二十日十三銭郵税二銭送金芝口●東京芝南佐久間町一の三建築書院^{注54)}

とする広告を新聞各紙で集中的に見ることができると、続刊の開始は明治26(1893)年7月20日からとするのが妥当である。

また、停刊の時期も明らかではないが、この点は『建築学講義録』合本の分量から以下のように考えることができる。つまり、『建築学講義録』合本では、本文828頁の内、“工業夜学校講義録”分は131頁で、“建築学講義録”分は残りの697頁となる。また、『工業夜学校講義録』分冊で本文は、先に見たように平均15頁で、1号、2号は建築科と製造科を合わせて15銭程、3号以後は別冊で6銭5厘の値段であったため、『工業夜学校講義録』分冊1頁当たり平均5厘程と考えることができる。一方、続刊の『建築学講義録』分冊は月1回20日の発刊で明治26(1893)年7月号は13銭^{注55)}、明治26(1893)年9月号は22銭^{注56)}とあることから、均して20銭とすれば、1回の頒布は40頁程となり、『建築学講義録』分冊の発刊は18回程であったことになる。ところで、前掲した跋文が明治27(1894)年8月で、続刊である『建築学講義録』分冊が月1回20日における発刊を守ったとすれば、続刊は明治26(1893)年7月から明治27(1894)年8月の終刊まで14回の刊行機会があったことになる。一方、明治24(1891)年2月になって東京へ移った滝が、前掲した『建築雑誌』54に記されるように少なくとも明治24(1891)年6月以後、『建築学講義録』分冊と名称を変更して出版を続けたとすれば^{注57)}、数回の出版回数が想定できる。

このように考えると冊子の分量から明治24(1891)年6月から間もなく『建築学講義録』分冊の刊行は滞ったとするのが妥当である。

5 『建築学講義録』合本の発行

前述のように滝は明治27(1894)年8月に『建築学講義録』分冊の刊行を終えたが、『建築学講義録』合本刊行の日付は、明治29(1896)年4月15日^{注58)}で、やや時間があく。この理由は『建築学講義録』合本などにも述べられないが、以下の理由を考えられる。

1点目は編集業務である。現在、『建築学講義録』合本を通覧しても『建築学講義録』分冊各回における出版の痕跡は前述した柱（ヘッダー）と割付の相違以外は見い出せない。これは逆に言えば『建築学講義録』合本発刊に際し、入念な編集作業が行われたことを意味する。つまり、『建築学講義録』分冊の終刊から『建築学講義録』合本刊行までの期間は、合本の編集に充てられたと考えられる。

2点目は単純に出版社における『工業夜学校講義録』分冊及び『建築学講義録』分冊の在庫を調整が挙げられる。

6 さいごに

滝大吉が明治21(1888)年11月頃から明治24(1891)年2月の時期に関西で行った活動を整理し、工業夜学校や同校で用いた『工業夜学校講義録』分冊、『建築学講義録』分冊の発刊や内容、『建築学講義録』合本発刊などを考察したが、明らかとなるは以下の諸点である。

1) 滝大吉らが明治23(1890)年6月1日に開始した工業夜学校は毎週月水金の3日、18時30分から21時まで授業が行われた。工業夜学校の講義録として同年10月5日に第1号が創刊された『工業夜学校講義録』分冊は、以後毎月5日、15日、25日に発刊され、少なくとも明治24(1891)年1月25日刊の9号までを確認できる。

2) 『工業夜学校講義録』分冊と『建築学講義録』合本を比較すると、内容の判明する『工業夜学校講義録』分冊4号までは『建築学講義

録』巻一の目次順に発刊がされている。また、『工業夜学校講義録』分冊1回分は、『建築学講義録』巻一の15頁分程の分量であった。

3) 滝大吉は、明治24(1891)年2月に居所を東京へ移し、以後、『工業夜学校講義録』分冊を『建築学講義録』分冊と名称を変更し出版を続けたが、明治24(1891)年6月から程なくして停刊に至った。

4) 『建築学講義録』分冊は明治26(1893)年7月から吉原米次郎の後押しで続刊が始まった。同書は毎月20日の発刊で、明治27(1894)年8月に終刊を迎え、編集作業を行い、明治29(1896)年4月15日に『建築学講義録』合本が刊行された。

参考文献

- 1) TAKI, D.: *KENTIKUGAKU-KOUGIROKU*, 1896. 4 bound volumes (in Japanese)
滝大吉：建築学講義録, 1896. 4 合本
- 2) MITUHASHI, S.: *KO-KOUKAKUSI TAKI DAIKITISI NO BEN*, Journal of Architecture and Building Science, No. 192, pp. 362-365, 1902. 12(in Japanese)
三橋二郎：故工学士滝大吉氏の伝, 建築雑誌 192, pp. 362-365, 1902. 12
- 3) SHIMIZU, K.: ON THE SECONDARY ARCHITECTURAL EDUCATION BEFORE OR AFTER SEVERAL YEARS SINCE 1887, Transactions of the Architectural Institute of Japan, No. 310, pp. 143-151, 1981. 12(in Japanese)
清水慶一：明治 20 年前後における中等建築教育の研究, 日本建築学会論文報告集 310, pp. 143-151, 1981. 12

注

- 注1) 平山：滝大吉の肖像写真と関西行について、日本建築学会計画系論文集 737、1793～1799 頁、平成 29(2017). 7
- 注 2) 平山：滝大吉にまつわる凌雲閣“伝説”の検証、日本建築学会計画系論文集 737、1801～1807 頁、平成 29(2017). 7
- 注 3) 参考文献 2)
- 注 4) 参考文献 2) 363 頁
- 注 5) 正確には三橋の追悼文にもある“建築部長”。日就社：読売新聞、明治 21(1889). 10/31、4 頁、に掲載の明治工業の広告にも“建築部長”とある。
- 注 6) 参考文献 3) 147～148 頁
- 注 7) 大阪朝日新聞社：大阪朝日新聞、明治 23(1890). 4/29、4 頁
- 注 8) 工学会：工学会誌 101、263 頁、明治 23(1890). 5
- 注 9) 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治 21(1888). 12/15、6 頁、によれば、井吉商店は明治 21(1888) 年 12 月の段階で明治工業会社の代理店で、同時に工学士の藤田重道による工業相談所が開設されていた。
- 注10) 造家学会：建築雑誌 42、106 頁、明治 23(1890). 6
- 注11) 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治 23(1890). 5/20、4 頁
- 注12) 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治 23(1890). 1/28、4 頁
- 注13) 造家学会：建築雑誌 42、105～106 頁、明治 23(1890). 6
- 注14) 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治 23(1890). 6/4、4 頁
- 注15) 従来、工業夜学校については、日本建築学会：近代日本建築学発達史、丸善、昭和 48(1972). 10、沢井実：近代大阪の工業教育、大阪大学出版会、平成 24(2012). 6、などにおいても記載は見られない。
- 注16) 参考文献 3) 150 頁、注 48)
- 注17) 五成社：神戸又新日報、明治 23(1893). 4/17、4 頁
- 注18) 五州社：神戸又新日報、明治 23(1893). 5/2、3 頁
- 注19) 堀勇良：奇傑として豪士に生きた滝大吉、近代日本の異色建築家、科学朝日 1982-7、91 頁、昭和 57(1982). 7。なお、この連載は後に、朝日新聞社から近代日本の異色建築家、94～102 頁、昭和 59(1984). 8、に一部が改変されて所収された。
- 注 20) 堀勇良：日本の建築明治大正昭和 10、98 頁、●14、昭和 56(1981). 8
- 注 21) 以下、煩雑ではあるが本稿においては、滝により明治 23(1890) 年 10 月に創刊され、工業夜学校の講義録として定期的に頒布されたものを『工業夜学校講義録』分冊、工業夜学校閉鎖後、『建築学講義録』として滝により発刊が続けられた書籍を『建築学講義録』分冊、とする。そして、『工業夜学校講義録』分冊と『建築学講義録』分冊を合本として発刊された書籍を『建築学講義録』合本と呼称する。なお、『建築学講義録』合本は 3 巻本で、その各々を指す場合は『建築学講義録』巻一、などの呼称を用いる。

- 注 22) 造家学会：雑報、建築雑誌 46、169 頁、明治 23(1890). 10
- 注 23) 日就社：読売新聞、明治 23(1890). 10/3、別刷 2 頁、に同内容の広告が掲載される。
- 注 24) 時事新報社：時事新報、明治 23(1890). 10/12、5 頁
- 注 25) ほぼ同内容となる広告が東京で発刊された、日就社：読売新聞、明治 23(1890). 10/13、4 頁、にも掲載された。なお、こちらは『時事新報』の広告がカタカナである箇所が平仮名となる等の相違がある。この他、工学会：工学会誌 107、513 頁、明治 23(1890). 11、にも“工業夜学校講義録”として学校の開校と講義録頒布の記事が掲載される。
- 注 26) 参考文献 1) 巻一、目次 1 頁
- 注 27) 参考文献 1) 巻一、目次 1 頁
- 注 28) 参考文献 1) 巻一、1 頁
- 注 29) 参考文献 1) 巻一、1 頁
- 注 30) 参考文献 1) 巻一、4 頁
- 注 31) 参考文献 1) 巻一、問答 15 頁
- 注 32) 日就社：読売新聞、明治 23(1890). 10/19、4 頁
- 注 33) 日就社：読売新聞、明治 23(1890). 10/30、4 頁
- 注 34) 参考文献 1) 巻一、目次 1 頁
- 注 35) 日就社：読売新聞、明治 24(1891). 11/6、4 頁
- 注 36) 参考文献 1) 巻一、目次 1 頁
- 注 37) 月評社：出版月評 37、1157～1158 頁、明治 23(1890). 12。なお、同書は奥付で印刷を明治 23(1890) 年 10 月 25 日とするが、同書 1155 頁掲載の、生田益雄：通俗亜仁林染料、は明治 23(1890). 11 月 5 日の発行となるため、出版月評 37 は明治 23(1890). 11 月 25 日の印刷と判断できる。
- 注 38) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治 24(1891). 1/28、3 頁
- 注 39) 日就社：読売新聞、明治 24(1891). 2/24、4 頁
- 注 40) 時事新報社：時事新報、明治 23(1890). 10/12、5 頁
- 注 41) 参考文献 2) 363 頁
- 注 42) 参考文献 3) 148 頁
- 注 43) 東京日日新聞社：東京日日新聞、明治 18(1885). 3/3、4 頁、小学校用 英字諸体懸図の広告によれば、“板元 東京芝露付町二十三番地 米倉順三郎”とあり、記事にある“米倉書店”は、明治 18(1885) 年当時は所在が異なるものの版元も兼ねた書肆であったことが分かる。
- 注 44) 造家学会：雑報、建築雑誌 54、172 頁、明治 24(1891). 6
- 注 45) 参考文献 3) 150 頁 注 54)
- 注 46) 参考文献 1) 巻三、830～832 頁。内容からこの文章は明治 27(1894) 年 8 月に終刊の『建築学講義録』分冊最終号に掲載されたと判断できる。
- 注 47) 参考文献 1) 16 版は、明治 42(1909) 年 3 月 15 日合本発行とある。
- 注 48) 造形学会：本会記事、建築雑誌 51、47 頁、明治 24(1891). 3
- 注 49) 交詢社：日本紳士録 12、273 頁、明治 41(1908). 1
- 注 50) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、大正 8(1919). 11/16、4 頁
- 注 51) 吉原米次郎：会員諸君に望む、建築雑誌 79、227 頁、明治 26(1893). 7
- 注 52) 造家学会：雑報、建築雑誌 79、228 頁、明治 26(1893). 7
- 注 53) 参考文献 1) 巻三、830～832 頁
- 注 54) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治 26(1893). 7/23、6 頁。他に 7/25、日就社：読売新聞、明治 26(1893). 7/22、4 頁、にも同じ広告が確認できる。
- 注 55) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治 26(1893). 7/26、6 頁
- 注 56) 東京朝日新聞社：東京朝日新聞、明治 26(1893). 9/26、5 頁
- 注 57) 明治 23(1890) 年 6 月に開校した工業夜学校に対し、『工業学校夜学校』分冊は夜学校の開校から 4 ヶ月後となる 10 月から刊行開始のため、『工業夜学校講義録』分冊は、明治 24(1891) 年 2 月頃に閉校したと考えられる工業夜学校の 4 ヶ月後となる明治 24(1891) 年 6 月まで刊行され、以後、『建築学講義録』分冊と改名し出版されたとすべきであろう。
- 注 58) 参考文献 1) 巻一、奥付

STUDY ON THE PUBLICATION OF “*KENTIKUGAKU-KOUGIROKU*”
LECTURED BY *DAIKITI TAKI* AND *KOUGYO-YOGAKKO*

Ikuo HIRAYAMA *¹

*¹ Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

This article paid off the activity that *Daikiti Taki* performed in *Kansai* from about November, 1888 to February, 1891, and considered “*Kogyo-yogakko*” which *Taki* founded, “*Kogyo-yogakko-kougiroku*” used in this school, and the process of the bound volumes publication of “*Kentikugaku-kougiroku*”. It is the following points to become clear.

In “*Kogyo-yogakko*” which *Taki* and others started on June 1, 1890, a class was performed three times every week of Friday, Monday and Wednesday from 18:30 to 21:00. And the separate volume of “*Kogyo-yogakko-kougiroku*” launched as a correspondence course in “*Kogyo-yogakko*” on October 5, the same year was published afterward on 25th on 15th on 5th of every month. *Taki* moved to *Tokyo* in February, 1891, he changed the name of an “*Kogyo-yogakko-kougiroku*” separate volume to an “*Kentikugaku-kougiroku*” separate volume afterward and continued publishing it, but the publication of the book stopped soon from June, 1891. “*Kentikugaku-kougiroku*” separate volume, continuing publication began in July, 1893 by pushing of *Yoneziro Yoshihara*, the publication of this book was 20th every month. The book met the final number of in August, 1894 and worked on editing, and “*Kentikugaku-kougiroku*” bound volumes was published on April 15, 1896.

(2018 年 3 月 9 日原稿受理, 2018 年 7 月 2 日採用決定)